瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
復活節第 5 主日　B 年（2024 年 4 月 28 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：使徒言行録　9 章 26 ― 31 節
第二朗読：ヨハネの手紙一　3 章 18 ― 24 節
福音朗読：ヨハネによる福音書　15 章 1 ― 8 節

わたしにつながっていなさい

よく知られている「ぶどうの木のたとえ話」が今日の福音朗読です。

イエスは最後の晩餐（ばんさん）で、弟子たちの足を洗いました。そして、ユダの裏切（うらぎ）りを予告しました。その後で、弟子たちに向けた長い長いお説教を始めます。これが告別説教（こくべつせっきょう）と呼ばれているものです。全体は三つに分けられます。

① 13 章 31 節― 14 章 31 節まで、
② 15 章 1 節― 16 章 33 節まで、
③ 17 章 1 節― 26 節までです。

今日の朗読箇所は、告別説教第二部の冒頭（ぼうとう）にあたります。そして、15 章全体はさらに二つに分けられます。

一つは今日の朗読箇所の大部分を含（ふく）む 1 ― 6 節と、
もう一つは 7 ― 17 節です。

前者は「まことのぶどうのたとえ」と呼ばれていますが、後者はたとえとの関連（かんれん）が失（うしな）われていき、弟子たちへの告別の内容となっていきます。ですので、「まことのぶどうの木のたとえ」は、告別説教とは別に語（かた）られたたとえではないかとする学者の意見もあります。

冒頭の「わたしはまことのぶどうの木である」に注目してみてください。『ヨハネによる福音書』には、「わたしは○○である」とイエスさまが語る場面があります。「○○である」のところは象徴的（しょうちょうてき）な言葉が使われています。今日の「わたしはまことのぶどうの木である」も、実際（じっさい）の「ぶどうの木」を意味しているのではないでしょう。

このようにイエスさまは、ご自分のことを語るときに、聞き手であるわたしたちに一つのイメージを与えてくれます。「ぶどうの木」は夏の光を受けて、たわわに実を結びます。豊かさのイメージでしょうか。ちなみに、日本の「ぶどうの木」は多くの場合「棚仕立て」といって、大きく育てて栽培地全体を囲うような栽培方法です。しかしもともとは、「ぶどうの木」はつるのある低木ですから、垣根のように植えるのが通常のようです。あまり大きく育ててしまうと実が小さくなりますから、いつも剪定などの手入れをする必要があるでしょう。そんな、パレスチナの人々なら誰でも知っている「ぶどうの木」を使って、イエスさまはご自分のことを語るのです。「わたしはまことのぶどうの木である」。

さて、「わたしは○○である」という表現には、多くの場合、その後に条件を示す言葉が連なります。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」（1－2節）。豊かな実りをもたらすために暑い中、枝を剪定する農夫の姿がこころに浮かびます。「いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」。手を入れて育ててくださるのは父なる神なのです。

しかし、時々、条件を示す言葉がないまま、「わたしは○○である」とイエスさまが言われる場合があります。今日の朗読箇所では5節がそれにあたりますね。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」（5節）。これは、イエスさまがご自分のことを語るのではなく、むしろ偽物や反対者を前提にしての表現かもしれません。ですから、「ほかでもない、このわたしがぶどうの木である。ほかでもないあなたがたが枝である」というニュアンスでしょうか。

「わたしにつながっていなさい」（4節）と、「つながる」という単語が何度も登場します。実を結ぶためにはイエスさまにつながる必要があるのです。教会も同じかもしれません。まず、教会がイエスさまにつながっている。そして、教会に集う人々一人ひとりが教会とつながっている。こうして、豊かな実りをいただけるのでしょう。復活のイエスさまなしの教会になってしまう危険性はいつもあります。教会につながらずに信仰を独力で得ようとする誘惑は必ずあります。しかし、イエスさまにつながっている教会に結ばれているからこそ、わたしたちの信仰は豊かな実を結ぶのです。

お知らせ

マリア祭　5月26日　ミサ開始は午前10時半　グランドにて

・緑鮮やかなグランドで、野外ミサをしましょう。
・ミサ後にお弁当を楽しみましょう。当日はお弁当などの販売があります。